

## 塔

塔が燃えている

ああ、と僕は呟いた  
その煙はいがらっぽくて  
遥か遠くに見える細長い海から  
とてつもない数の嘘だか真実だか分らぬ歴史

塔が燃えている

美しい、と僕は思った  
石でできた建物に空いた口  
そこからカンゾウの花のように咲き出る炎  
まるで温度など有さないように見える魂の葬列

握りしめるこぶし  
強く閉じる脛  
歯を食いしばり  
僕は耐えるしかなかった

鳥は震えている  
怯えている  
空は抜けるように青いまま  
オレンジ色に染まらない

燃えるがいい  
崩れる寸前まで  
黒焦げの壁を残すのみとなるまで  
燃え続けるがいい

燃え尽きたなら、その時  
僕は黒焦げの階段を上るのだ  
灰となった驕慢を踏み越えて  
更なる野望を積み重ねるために

塔が燃えている  
眠れる種子を芽生えさせるために

(2011.6.19)